

SVA ミャンマー(ビルマ)難民事業事務所 研修レポート
ビルマ難民キャンプにおける人々の伝統文化に対する意識調査
～これからの SVA 伝統文化教室の模索～

恵泉女学園大学4年 鈴木かほり

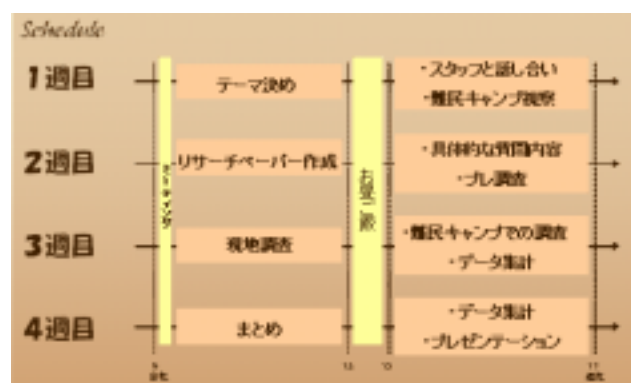
はじめに

「カレン民族が好き」、この研修への参加を希望した動機である。以前、大学のプログラムで3ヶ月間、タイのカレン民族の村で体験学習をした。稲刈りや薪集めに村人と共に出かけ、畑で捕まえたネズミや虫を共に食べ、囲炉裏を囲んで暮らす中で、私はカレンという民族に恋をした。

日本に帰国後、「カレン民族」をキーワードに、数ある国際協力NGOからSVAを見つけ、国内事業課の絵本を届ける運動でインターンを始めた。私が知っている「タイのカレン民族」とは、また違った背景を持つ「ビルマ難民キャンプに住むカレン民族」。彼らのことをもっと知りたい、その想いを胸に、2008年2月11日～2008年3月9日、タイ北部、ビルマとの国境の町メーソットにある、SVA ミャンマー(ビルマ)難民事業事務所研修をさせて頂いた。

研修スケジュール

1ヶ月間にわたる研修は、下図のようなスケジュールで行われた。



調査内容

調査テーマ

「ビルマ難民キャンプにおける人々の伝統文化に対する意識調査～これからの SVA 伝統文化

教室の模索～」

調査目的

- 難民キャンプにおける人々の伝統文化に対する意識を知る
- これからの SVA の伝統文化教室を模索する

SVA ミャンマー(ビルマ)難民事業事務所では、難民キャンプにおける図書館活動の一環として、伝統文化活動を行っている。現在の活動内容は、カレン民族の伝統舞踊と 3 種類の楽器の演奏だ。

キャンプを訪れた際、この伝統文化を見せてもらう機会があった。鳥肌が立つほど素晴らしい、私は直ぐにその魅力に惹かれた。しかしその一方で、伝統文化教室があまり上手くいっていないという話も聞いた。その原因は何か。人々が伝統文化に興味がないためなのか、それとも、SVA 伝統文化教室の活動内容に関係があるのか。人々の伝統文化に対する意識を調査することで、これからの SVA 伝統文化教室を模索していきたい。この 2 つの目的からこの調査を行うことにした。

調査方法

- 図書館利用者からのインタビュー

メラキャンプにある 6 つの SVA 図書館において、図書館利用者にインタビューした。当初、伝統文化に対する意識は世代間のギャップがあるのではないかと予想していたため、子ども・若者・大人の 3 層からそれぞれ 10 人前後を選び、計 30 人にインタビュー調査をした。

年齢(歳)	人数(人)
8～15	12
16～25	11
26～55	7
合計	30

インタビューは、キャンプスタッフや、メーソットの事務所スタッフに同行してもらい、カレン語やビルマ語から、タイ語や日本語に訳してもらいながら行った。インタビュー時の質問項目は、最終ページのとおりである。

- SVA 伝統文化教室の先生と生徒からのインタビュー

メラキャンプの SVA 伝統文化教室の先生 5 人(72 歳のおじいさん 1 人と 17 歳前後の少年少女 4 人)と生徒約 11 人(10～14 歳)にもインタビューし、話を聞かせてもらった。

メラキャンプについて

位置

今回の調査を行ったメラキャンプは、ターク県メーラマ郡に位置する。メーソットからは 60km、車で 1 時間ほどである。舗装された一本道をメーソットから走っていくと、山の中に急に不自然に現れるのがこのキャンプである。道路沿いに約 4km に渡って続くこの大きなキャンプは、周りはビルマとの国境である山に囲まれ、敷地面積は約 2 平方km に及ぶ。とても 1 日で回れる広さではない。キャンプは鉄条網の柵で道路と隔てられているが、ところどころに穴が開いているので、道路に出ることは容易である。しかし、キャンプの両端には検問所があり、警察官が警備にあたっているため、出るといっても、自由にキャンプの外に出られるわけではない。



図 1 メラキャンプの位置

(SVA のホームページ <http://sva.or.jp/myanmar/bg> 参照)

背景

メラキャンプは 1984 年から 20 年以上も続くキャンプであり、ビルマから逃れてきたカレン民族を中心とした難民が住んでいる。彼らが難民となった背景は様々である。ビルマ軍によって村を焼き討ちにされた者、ポーターとして労働を強いられたところを逃げ出してきた者、中には武装したカレン民族によって村を追われてきた者もいる。しかし、いずれもビルマの軍事政権が、カレン民族を分裂させて互いに戦わせようという意図がみられる。

今では、キャンプで生まれる子も多くいる。また、キャンプ内はビルマ本国に比べて教育の質が高いため、勉強を目的にキャンプに移住する学生もいる。

人口

人口は、38,935 人¹、8,388 戸である。この人口は既にキャンプの収容可能人数を遥かに超えて

¹ 2008 年 1 月 31 日 UNHCR。このデータは、難民登録されている人の数であり、難民登録されていない人や、新しくキャンプに来た人は含まれていない。そのため、実際はもっと多くいると予測される。

いとされている。民族構成は、カレン民族 97%、ビルマ民族 2%、その他 1%である。宗教構成は、仏教 40%、キリスト教 45%、イスラム教 15%であり、キャンプ内には、寺や教会もある。

キャンプ内の様子

キャンプ内は、とにかく家が密集している。また、食べ物や雑貨を売る店、服やアクセサリを売る店、食堂、学校、小さなテレビで VCD や DVD を皆で見るような映画館もある。キャンプ内で一つの経済、社会が成り立っているといえる。UNHCR や様々な NGO が入っているため、キャンプ内の生活水準は比較的豊かであり、周辺のタイの村との格差も生じている。

考察

人々の伝統文化に対する意識調査

調査を進めていく中で、民族間のギャップ、世代間のギャップ、宗教間のギャップ、親の意識によるギャップが浮き彫りになってきた。

民族間のギャップ

調査対象者 30 人をカレン民族とその他の民族で分けて分析したところ、「自分の民族の伝統文化が大切か?」と「自分の民族の伝統文化で知っているもの(特に手工芸、昔話、詩)」という質問で特徴が表れた。

民族	全回答者(人)	伝統文化は大切と回答した人	伝統文化を知っている人		
			手工芸	昔話	詩
カレン	23	95%	100%	95%	100%
その他	7	57%	71%	42%	42%

ビルマ民族、モン民族、カレニー民族、カチン民族、ムスリム

・ メラキャンプではカレン民族が多数派であり、その他の民族は少数派

カレン民族では大多数が伝統文化は大切と答えたが、その他の民族ではわずか 57%であった。「カレン民族が多数派のこのキャンプで、ビルマ民族の伝統文化が大切だなんて言えない。」と、ビルマ民族の男性が答えていた言葉が印象的であった。また、キャンプで生まれたモン民族の女の子は、モン民族の民族衣装を見たことがないと言っていた。

・ その他の民族は伝統文化に触れる機会が少ない

カレン民族では、大多数が伝統文化を知っていたが、その他の民族では認知率は低く、特に詩と昔話については、知っている者はわずか 42%であった。この差はなぜだろうと考えた時に、

「図書館では図書館員がよく詩や昔話をしてくれる、でもそれはほとんどがカレンのものだ」という話を聞いた。

また、あるムスリムの女の子からは、「私は学校に通ってないから文字が読めない。でも毎日図書館に来ているから、カレン語が少し読めるようになってきた。」との声も聞いた。少数派が多数派の文化を少しずつ吸収していく環境が、ここにあると感じた。

世代間のギャップ

調査対象者 30 人を年齢別に子ども、若者、大人の 3 種類に分けて分析したところ、「自分の民族の伝統文化が大切か？」と「伝統文化を習いたいか？」という質問で特徴が表れた。

年齢 (歳)	全回答者 (人)	伝統文化は大切 と回答した人	伝統文化を習いたいか？		
			習いたい	時間があったら習いたい = 時間がない	興味ない
8～15	12	66%	66%	25%	8%
16～25	11	100%	72%	27%	0%
26～55	7	100%	14%	85%	0%

・学校の勉強の方が伝統文化よりも大切

伝統文化は大切と答えた人は、16 歳以上の若者と大人では全員であったが、15 歳以下の子どもでは、66%と低い。その理由として、学校の勉強のほうが伝統文化よりも大切だという認識があるようだ。

・多くの人が伝統文化を学ぶことに興味があるが、通う時間がない

「伝統文化を習いたいか？」という質問に対して、年齢を問わず大多数が「習いたい」か「時間があったら習いたい」と回答していることから、伝統文化に対して興味を持っていることが伺える。しかし、実際のところ時間がないのが現実のようだ。その理由として、子どもや若者は学校が忙しく、大人は仕事が忙しいことが挙げられるようだ。

宗教間のギャップ

調査対象者 30 人を宗教別に分けて分析したところ、「自分の民族の伝統文化が大切か？」と「伝統的な習慣について知っているか？出来るか？」という質問で特徴が表れた。

宗教	全回答者 (人)	伝統文化を大切と回答 した人	伝統的な習慣について	
			知っている人	行うことができる人
仏教	19	78%	100%	100%
キリスト教	10	100%	80%	30%
イスラム教	1	100%	100%	100%

・ **何人かのキリスト教徒は伝統文化に触れる機会がない**

伝統文化、特に習慣は、生活に根ざしていることから一番残っているところなのではないかと考えた。予想通り、仏教徒やイスラム教徒は全員が伝統的な習慣について、知っており、自分でも行うことができると回答した。しかし、キリスト教徒ではその数字が低い。その理由を尋ねると、「キリスト教徒は、一般的に伝統文化を好まない」と回答が返ってきた。確かに、特にカレン民族の伝統文化は精霊信仰が関係してくるため、習慣というと、精霊の儀式も含まれることから、キリスト教徒は行わないという事実もわかる。しかし、あるカレン民族のキリスト教徒の人が言っていた。「ビルマの村にいた時は、ほとんどの村人がキリスト教徒だったから、伝統文化に触れる機会は全くと言っていいほどなかった。でもキャンプに来て、はじめて伝統文化という存在が身近になった。時間があれば是非習いたい。」と。

また、「自分の民族の伝統文化が大切か？」という質問でも、キリスト教徒の人は全員が大切と答えている。好む、好まない、もちろんこれもあるとは思いますが、触れる機会があるか、ないかの違いではないだろうか考える。

親の意識のギャップ

調査対象者30人中、既に子供がいる6人を対象に、インタビューを行った。「自分の子供に伝統文化を習わせたいか？」と質問をしたところ、習わせたいと回答したのが4名、子供次第と回答したのは2名であった。習わせたいと回答した人からは、「自分の民族のものだから習って欲しい」、「子ども達は時間があるから習って欲しい」、「自分の子供だけでなく、周りの子どもたちにも習って欲しい」という意見が聞かれた。一方、子供次第と回答した人からは、「学校の勉強の方が大切だ」という意見も聞かれた。

また、世代間のギャップで、「伝統文化は大切ではない」と回答した4人の子どもを対象に、「両親は伝統文化が出来るか」と質問したところ、両親は伝統文化が出来ると答えた子どもはわずか1名であった。

伝統文化教室の生徒の意識

伝統文化教室の生徒達にインタビューをした。彼らの意識の高さが印象的だった。12歳の少年は、難民キャンプにおける伝統文化が抱えている問題について次のように述べてくれた。

・ 伝統文化に興味があっても言い出しにくい環境

「伝統文化 = かっこ悪い(ダサイ)」、キャンプ内における伝統文化に対するイメージだ。もし興味があっても、興味がない人が多いため、なかなか興味を示せないという環境もあるようだ。

・ 伝統文化に対する親の関心度合の影響

伝統文化教室に通っている生徒の親は、伝統文化に対して意識が高いようである。両親も昔、伝統文化教室の生徒だったという人や、両親も伝統文化を習って欲しいと思っている人がほとんどのようだ。ある生徒は、「伝統文化は難しく、時々くじけそうになる。でも親が頑張れ、と応援してくれるから、頑張っ続けてられる」と話してくれた。

一方、友達の中には、「伝統文化が出来ても何にもならない」という考えを持つ親もいるため、伝統文化を習いたくても習えない人もいるという。

伝統文化教室の先生の意識

むかしむかし 一本の木があった

ある日 大雨がふったため 木は2つにわれてしまった

川のなかで ひとつの木のかけらは こっちに

もうひとつの木のかけらは あっちに ながれていった

そのあと それぞれにきれいな花がさいた

伝統文化教室の先生が教えてくれたカレンの詩だ。「もともと一つだった木が、二つに割れ、それぞれにきれいな花が咲いた」これは、カレン民族の2大グループ、ポー・カレンとスゴー・カレンを表しているようだ。一般的に、ポー・カレンは仏教徒が多く、スゴー・カレンはキリスト教徒が多いと言われている。また、ビルマ軍と戦っているキリスト教徒系のカレンと、ビルマ軍と停戦合意した仏教系のカレンとに分けられることもある。

しかし、この先生は、カレンを分けてほしくないと言う。「もともとは同じカレン民族、2つに分かれたけれども、それぞれにきれいな花が咲いている。ポー・カレンでもスゴー・カレンでもいいじゃない。キリスト教徒でも仏教徒でもいいじゃない。互いに認め合って、皆で一緒に生きたい、皆で平和になりたい。」と語ってくれた。そして「これはカレンだけではなく、皆に言えること。同

じ人間なのだから。」と付け加えてくれた。

また、伝統文化教室ではこの詩に合わせ、3種類の楽器を一緒に演奏している。これらの楽器は、元々一つ一つで演奏するものだが、一緒に演奏することで、違うもの同士でも一つになれる、分かり合えるということを表しているようだ。

これからのSVA 伝統文化教室に向けて

以上の調査、考察の結果をまとめ、これからのSVA伝統文化教室はどうあるべきかについて模索していきたい。

民族間のギャップの解消に向けて 他の民族の伝統文化の先生も見つけること

これは難しい問題である。カレン民族以外の民族はキャンプ内の人口が少ない分、伝統文化を教えられる人も少ないと考えるからだ。また、もし探せたとしても、沢山の生徒が伝統文化教室に集まるとも考えられない。しかし、元々難民キャンプという場所に来ることになった背景、ビルマで少数者として抑圧されてきた背景を見ると、難民キャンプに逃げてきた今、多数派のカレン民族のみの伝統文化を扱い、小数派の伝統文化は出来なくても仕方がないとするのもおかしい。

また、現地のスタッフから、「カレンが多数派を占めるこのメラキャンプでは、カレンの人が先頭に立って、このギャップを解消していく活動を行っていくことが大切だ」とアドバイスを頂いた。カレンの伝統文化教室の先生の「同じ人間なのだから」という考え方からすると、実現可能ではないだろうか。

世代間のギャップの解消に向けて 伝統文化の先生が学校に教えに行くことも可能である、夏休みなどを利用して集中的に行うことも可能である

世代間のギャップでは、伝統文化に興味を持って人、習いたいと思っている人は多いのにも関わらず、学校や仕事が忙しく通う時間がないという問題点が明らかになった。

仕事が忙しいのは、仕方がないと思う。しかし、子どもや若者に関しては、改善する余地はあると考える。例えば、学校が忙しく、通う時間がないのであれば、学校に先生が教えに行くことも可能ではないだろうか。また、夏休みという時間が取りやすい時期を使って、集中的に教室を行うことも可能であると思う。

宗教間のギャップの解消に向けて 伝統文化と現代文化のコラボレーション、新しい伝統

文化の創造

宗教間のギャップは信仰の違いもあると思うが、きっかけがあるかないかの違いではないかと考えた。伝統文化教室の生徒も言っていたが、「伝統文化 = かっこ悪い(ダサイ)」という認識がある限り、新しく習いたいという人は少ないと思う。

伝統文化教室の先生から次のような提案があった。「若い人たちは伝統的なものよりも現代のものに興味がある。例えば、楽器ではピアノに人気がある。現代のものでも良いものはたくさんある。対抗するのではなく、融合したらどうか。伝統文化と現代文化をコラボレーションし、魅力的な伝統文化を創造することで、伝統文化に興味がある人も、もともとは興味がなかった人も一緒に生きていけるのではないか。」

文化というのは時代によって変わっていくものである、何を伝統文化と呼ぶのか、形にこだわるのか、それとも心にこだわるのかという議論もあるだろう。「伝統文化 = 守るもの」だけでなく、「伝統文化 = 育てていくもの」にもしたらどうだろうか。相手を否定することもなく、妥協することもなく、互いに認め合いながら共に歩むことで新たな伝統文化が創造できるのではないか。

親の意識のギャップの解消に向けて 大人の伝統文化に対する意識を高めるためのアプローチ

これからは子どもだけでなく、大人にもアプローチをしていくことが大切であると思う。親が興味を持てば、それは少なからず子どもに影響する。親の意識を変えていくことで、少しずつ環境も変化していくだろう。

学びと感想

今回、伝統文化をテーマに研修をしてきたが、私は伝統文化が絶対だとは言わない。伝統文化は人生を豊かにするものの一つであると思う。伝統文化を最も重要なものとして位置付けるか、何番目に位置付けるかは、人それぞれが決めれば良いのではないだろうか。しかし、伝統文化へアクセスできる環境があること、それを選ぶ権利があることは、とても重要だと思う。

難民キャンプにおける伝統文化教室が持つ役割は何だろう。自らの民族の文化を、アイデンティティを守っていくことかもしれない。人によって考え方は色々あると思う。カレン民族の男性の一人が言った言葉が印象に残っている。この男性は39歳、10年生まで学校に通うという高学歴を持ち、現在は通訳(タイ語、ビルマ語、英語)の仕事をしている。そんな彼が「SVAの伝統文化教室で年長者向けのカレン語教室を開いて欲しい」と言ったのだ。ビルマではカレン民族でも

カレン語を話せない人が多く、彼もその一人だという。それは、カレンというだけで嫌われるからだそうだ。しかし、難民キャンプに来た今、彼はカレン語を習いたいという。私は彼の言葉を聞いて、伝統文化が難民の人々にとって心のよりどころに、生きる希望のような存在になっているのではないかと感じた。難民キャンプという場所は、生きるために必要な衣食住は揃っているが、人として生きるには満たされているとは言い難い。その中で何を希望に、何を強さにして生きていくのか。それは自分のルーツに頼ること、伝統文化意識であったり、民族意識であったりするのかもしれないと思った。

また調査とは関係なく、今回難民キャンプを訪れて嬉しい発見があった。それは、キャンプの人も私と同じ人間だと実感できたことだ。難民と聞くと、どのようなイメージを抱くだろうか。私は、暗くて、とても大変で、生きる希望を失った人々、と必要以上に特別視していたように思う。キャンプに入り、インタビューをし、また子どもたちと一緒に遊ぶ中で、キャンプの人も私達と同じように笑い、忙しく今日という日を生きていることを当たり前ながら初めてわかった。難民というと、私は彼らの姿を思い出す。私にとって彼らは、難民というより、メラキャンプという場所に住んでいる友達だ。

しかし、忘れてはいけないことがある。それは、彼らが難民であることだ。最終日、仲がよかったキャンプのスタッフが、絵をくれた。そこにはビルマで暮らしていた時に、村が焼き討ちにされ、人々が逃げている様子が描かれていた。

キャンプの人々が持つ笑顔と背景。この2つは、対照的であるようにも思えるが、両方とも大切なことであり、忘れてはいけないことなのだと思えた。

おわりに

今回の調査では、沢山の人にお世話になった。キャンプでのインタビュー、特に言語の面では、日本語が話せるキャンプスタッフを始め、運転手までもが、調査を手伝ってくれたこと、何よりもスタッフの理解と協力のおかげで沢山のデータを上手く集めることが出来た。

また、私がキャンプの人々とコミュニケーションがとれるようにと、友達やスタッフが事前に自己紹介と質問内容のカレン語を覚えてくれたことにより、私自身が直接彼らと話すことが出来た。その影響なのか、インタビュー中はカレン語の歌をお互いに歌いあったり、実際に昔話やダンスをやって見せてくれたりと話しが弾んだ。また、さらにカレン語を教えてくれる人や、第三国定住でアメリカに行く際に成田を経由するからその時また会えるかしらと飛行機の時間を教えてくれる人、ビルマが平和になったら是非ビルマのカレンの村に遊びにきてほしいとビルマの住所をく

れる人もいた。調査のために彼らにインタビューするという事実は否めないけれども、それに加えて一人の人として彼らのことを知りたい、彼らと話したいという姿勢を私自身も持ち続けることが出来たし、彼らも調査者としての私だけじゃなくて一人の人として私と話してくれたのかな、認めてくれたのかなと思う。

今回の調査は、まだまだ甘いところがあることは否めないし、出来ないことを挙げたらきりが無い。しかし、今の私だからこそ出来たこと、語学も知識もこのレベルしかないからこそできたことを大切にしたいと思う。それはやはり、一方的に聞くだけでなく、一緒に遊んだり、世間話をしたりと対等に交流できたことと、そういう時間を大切にできたこと、そして調査対象者である前に私はカレンの人々が好きということだ。私は情報をくれたキャンプの人々に、「私はあなたたちからこんな学びをさせてもらった」と、自信をもって言うことが出来る。

この研修が私にとって終わりではなく、はじまりであることを忘れずに、これからも私なりに、難民キャンプの人と、国際社会と、そして自分自身と向き合っていきたいと思う。その中で、これから具体的に何をしていくか、何が出来るかをゆっくり考えたい。

小野さん、美生さんをはじめとする SVA メーソットのスタッフ、メラキャンプの皆さん、カレン語、タイ語を徹夜で教えてくれ、調査やプレゼンテーションの練習に付き合ってくれたスタッフの娘の miki ちゃん、一緒にインターンをしたゆきちゃん、そして藤川さん、市川さんをはじめとする SVA 東京事務所のスタッフの皆さん、メーソットの町で出会った全ての方に感謝の気持ちでいっぱいです。どうもありがとうございました。ダブル！（カレン語でありがとう）

図書館利用者への質問項目

基本データ：性別・年齢・民族・宗教・職業・生まれた場所

Q1: SVA 図書館にはどのくらい来るのか？

Q2: SVA の伝統文化教室を知っているか？

Q3: 自分の民族の伝統文化で知っているものは？（歌・楽器・ダンス・料理・昔話・詩・手工芸・習慣・遊び・マナー・その他）

Q4: 自分の民族の伝統文化で知っているものの内、自分が出来るものは？

Q5: 自分の民族の伝統文化で知っているものはどこで、誰から教えてもらったのか？

Q6: 伝統文化は大切だと思うか？なぜか？

Q7: 伝統文化を習いたいのか？もし子どもがいたら、自分の子供に伝統文化を習わせたいと思うか？

Q8: 伝統文化教室にもっと伝統文化のバラエティーを増やした方が良いと思うか？その他の民族の人は、自分の民族の伝統文化教室が必要だと思うか？例えばどんなものか？

伝統文化教室の写真



カレン民族の伝統舞踊と演奏



3種類の楽器の演奏



伝統文化教室の生徒



伝統文化教室の先生